

本日、第五十六回愛育班員全国大会に出席し、各地から参加された愛育班員、並びに関係者の皆様にお会いできましたことを大変うれしく思います。

これまで長年にわたり、献身的に活動してこられた愛育班の皆さま、愛育班員の活動を導き支えつつ、保健師として人々の健康を守ってこられた育成者の皆さまに感謝と敬意を表します。また、本日表示彰を受けられる方々に心からお祝い申し上げます。

恩賜財団母子愛育会は、昭和八年十二月、上皇陛下のご誕生にあたり、母と子が健やかに成長することを願われた昭和天皇の深い思し召しにより、翌年二月に設立されました。その後、愛育班員は、子どもを育てる家族と高齢者を中心に、幅広い人々と関わり、声かけを大切にされ、見守ってこられました。地域の人々が健康に安心して暮らせるように願いつつ、愛育班の皆さまが積極的に活動されながら、優しく寄り添っていることを心強く思っております。

私は昨年九月に福島県南相馬市を訪れました。南相馬市では、東日本大震災の後、多くの人々が市外へ避難しましたが、震災から二年後の平成二十五年に、子どもたちが健やかに育ち、皆が健康に生活できる地域づくりを目指して、「南相馬市母子愛育会」が結成されました。当日は、澄みわたる青空の下、秋の恒例行事の「親子いもほり大会」に参加し、子どもたちとその家族と一緒に柔らかな土にふれ、収穫を喜び合いました。

今年一月には、埼玉県ときがわ町を訪れ、今年で結成八十年を迎える母子愛育会埼玉県支部の取り組みについてお聞きしました。そして、ときがわ町の愛育班員、子どもたちやその家族と、手や指を使つて絵を描く「キットパスアート」や、大きな円形の布を動かすパラバルーン遊びを楽しみ、その後には、高齢者を対象にした地域ふれあい事業の介護予防体操に加わり、心和む時間を過ごしました。また、保健師が、自分ひとりでは行き届くことが叶わない地域の健康づくりを、愛育班の皆さまと今後も助け合つて進めていきたいと話されていたことも、印象に残っています。

この後、宮城県石巻市で被災された遠藤様の特別講演を皆さまと伺います。遠藤様は、深い哀しみを抱えながらも、周りの人々とのつながりを大切にされながら、

震災の影響を受けた子どもたちの心のケアを続けてこられました。今年の元日に発生した能登半島地震でも、多くの人々が命を落とし、今も困難な暮らしを送っている方々が数多くいらっしゃいます。講演をお聞きして、被災された子どもやその家族、また高齢者などへ思いをめぐらしていくことができましたらと考えております。

今から八十七年前の昭和十二年に、山梨県の みなもとむら 源 村が愛育村の指定を受け、現在は南アルプス市愛育会として活動が続いています。私は平成二十四年に みなもと 源 母子愛育館を訪ね、初代愛育班長として四十年近く活動された、矢崎きみよさんの言葉と出会いました。愛育の母と呼ばれ、親しまれた矢崎さんの言葉は「愛育のころ」として語り継がれています。

「どんなことをするときにも人の和が大切です。」

本大会に集う皆さまをはじめ、全国の愛育班活動に携わる方々は、人々の健康と幸せのために、これまで様々な場で保健師と共に力を尽くしてきました。これからも、皆さまが大切にされている「愛育のころ」、「人の和」が若い世代へも繋がっていくことを心から願い、大会に寄せる言葉といたします。